



KYORIN JEC

Winter 2005

JEC Winter 2005

< TABLE OF CONTENTS >

■特集：「新しい外国語学部」

「東アジア言語学科」紹介.....	金田一秀穂.....	2
「新しい外国語学部」を伝えるために.....	原田 範行.....	4

■論文コンテスト結果発表

論文部門作品紹介.....		6
論文部門審査・講評.....	金田一秀穂.....	7
翻訳部門作品紹介.....		8
翻訳部門審査・講評.....	黒田 有子.....	9

■学生生活だより

ゼミナール紹介

赤井ゼミナール・伊藤ゼミナール.....		10
稲垣ゼミナール・今泉ゼミナール.....		11
岩崎ゼミナール・江戸ゼミナール.....		12
木崎ゼミナール・金田一ゼミナール.....		13
草場ゼミナール・楠家ゼミナール.....		14
熊谷ゼミナール・黒田ゼミナール.....		15
小山ゼミナール・諏訪内ゼミナール.....		16
詹ゼミナール・高木ゼミナール.....		17
田中ゼミナール・玉村ゼミナール.....		18
塚本ゼミナール・豊田ゼミナール.....		19
鳥尾ゼミナール・中村ゼミナール.....		20
長谷川ゼミナール・原田ゼミナール.....		21
パロケッティゼミナール・古本ゼミナール.....		22
本田ゼミナール・マクミランゼミナール.....		23
吉村ゼミナール・渡辺ゼミナール.....		24
八王子市立高倉小学校クリスマス会.....	豊田ゼミナール.....	25
杏園祭をふりかえって.....	杏園祭実行委員会.....	28

■教員トピックス

新任教員紹介.....	岩本 和良.....	30
	木崎 英司.....	31

東アジア言語学科のこと

外国語学部教授 金田一秀穂

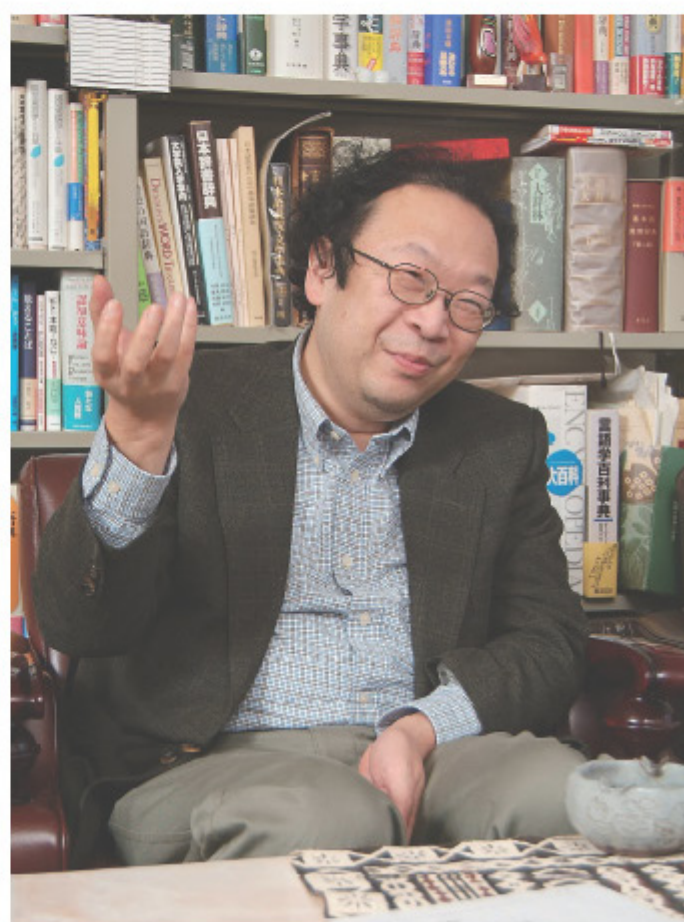
新年度から、外国語学部には、東アジア言語学科が開設されます。

以前、外国語学部には、中国語学科と日本語学科がありました。英米語学科と統合されて、外国語学科として一つになった経緯があります。それが新年度から、新たなスタッフを迎え、中国語、韓国語、日本語を併せた東アジア言語学科として生まれ変わります。

中国、韓国、日本の東アジア三国は、はるかな昔からお互いの交流の歴史があります。中国の漢字文化、儒教文化、律令制度や仏教などの様々な文明は、東アジアを事実上一つの大きな文化圏としてきました。様々な確執があり、さまざまな不幸な歴史があるものの、お互いの関係は、空間的にも人文的にも、他の諸外国との関わり合いに比べて、極めて濃厚であり、深いものでした。この三国のどの国も、隣り合うお互いの国を意識しないではできませんでした。

そして今、例えば世界経済のことを考えて見ましょう。中国の改革開放政策の成果は目覚ましいものがあり、世界の経済を席卷しつつあります。その GNP が日本を抜き、近い将来世界第二位の経済大国になることは時間の問題であると言われていています。韓国は抜群の勤勉性と熱意によって、極めて先進的な工業国になっています。自動車産業や電気産業は、日本と肩を並べ、あるものは陵駕しています。そしてわたしたちの国、日本。この三国が、世界の中で今以上に重要な立場に立つことになるのは、遠い未来のことではないでしょう。

今ヨーロッパでは、キリスト教文化を中心として、互いの違いを超えた一つの統合体になろうと努力しています。これと同じことが、



これからの東アジアには起こらざるを得ません。幸いこの三国は、漢字という文字を共有しています。わたしたちはお互いにわかりあうことが可能です。漢字はお互いの理解を容易にしています。韓国でも、一時期のハングル文字化運動は終焉しつつあり、漢字の国際性について見直されようとしています。文字を中心とした、つまりお互いに意味の分かる言葉を媒介としているということは、一つのとても重要なコミュニケーション回路を共有しているということなのです。

だからと言って、簡単に一つになれるわけではありません。また単純に一つになることがいいというわけでもありません。わたしたちはお互いの違いを尊重しなければなりません。貴重な血を流した経験を決して忘れてはいけません。

歴史的な問題だけではありません。中国では反日運動が起きているという報道がありました。天然ガス田や島の領有権をめぐる緊張した論争が起きていると言われます。教科書問題や靖国問題について、批判されていま

す。日本人拉致についても無視できません。この地域には解決しなければならない問題が山積みされています。しかし、多くの場合、その原因として、お互いの無理解が考えられると思います。相互不信と近親憎悪。あまりにもお互いを知らな過ぎる。彼らも、そしてわたしたちも。

わたしたちは、こんなにも密接な関係を持つ三国に横たわる無理解をなくすことが、これからの世界のなかで最も重要な課題の一つになると考えます。平和で美しい未来の日本を子孫たちに残すためにも、わたしたちが始めなければなりません。東アジア言語学科を立ち上げる目標は、まずそこにあります。

わたしたちは、あまりにも知らな過ぎます。彼らが本当は何を考えているのか、彼らが本当はどう感じているのか。杏林大学の外国語学部には、幸いにも、それを知るための貴重な財産があります。一つは優秀な教師たち。もう一つはその国々から来た多くの留学生たちです。

杏林における中国語の伝統については、言うまでもありません。私立大学としては異例なほど、中国語の教師が充実しています。中国から来た中国語を母語とする中国人教師も大勢います。韓国語についても、韓国人専任教師を迎え、教えることができます。またキャンパスには、生の中国語、本物の韓国語を話す留学生たちが、同じ教室、同じ机に並んで学んでいます。彼らは大喜びで、友人として仲間として、自分の国のことを教えてくれるでしょう。

相互の理解のために、わたしたちは彼らに日本をわかってもらうことを忘れてはいけません。日本について発信する努力も怠ってはいけません。彼らに日本を理解してもらうために、日本語を理解してもらうこと。

海外で日本語を教えてきた教師が、外国語学部には大勢います。世界中で日本を分かってもらってきた教師たちが、どうやったら日

本を理解してもらえるのか、その方法を伝えます。世界中に、日本を知りたいという人たちがいます。東アジアに限らず、アジア全域、南北アメリカ、オセアニア、ヨーロッパ、アフリカ。彼らは日本についての情報を待っています。日本語を学びたいと願っています。そこで教える教師を育てるのが、東アジア言語学科の大きな目的の一つです。

外国語を学ぶ最終的なコツは、自分の母語についてよく知ることです。母語が分かれば、コトバが分かり、コトバが分かれば、外国語が分かります。

相手の国を知るためには、自分が自分のことを知っていなければなりません。何かを伝えたいのなら、伝えるに値する何かを自分は持っていなければなりません。また、外国を知るということは、自分の国を知るということでもあるのです。

わたしたちは一人ぼっちではありえません。日本は孤立できません。いやおうなしに、国際環境の中に暮らしていかざるを得ません。まず、お隣の国々を知ることが、日本が国際的に存在し、発信と受信をしていこうというときに、何よりも必要なことです。

そういう責任ある仕事の一翼を担えることは、教師としても名誉なことであり、嬉しいことです。新しい学生たちがどんな顔をして春に入ってくるのか、どんなふうになって、やがて学窓を巣立っていくのか。わたしたちはわくわくしながら、来春を待っています。



「新しい外国語学部」を

伝えるために

外国語学部教授
広報委員長

原田 範行



I. 進化する外国語学部

JEC 夏号でも既にご案内いたしました、2006年4月から、外国語学部は従来の1学部1学科制を改め、3学科6コース（英語学科（英語教育コース、英語ビジネスコミュニケーションコース）、東アジア言語学科（日本語教育学コース、中国語ビジネスコミュニケーションコース）、応用コミュニケーション学科（表現メディアコース、観光文化コース））制へと進化します。これは、従来から本学部教育の基礎として重視してきた語学力育成をさらに徹底するとともに、各学科各コースが教育目標・到達点を明確に定めることで、学生諸君の大学教育におけるキャリア形成を強化したいとの考えによるものです。新カリキュラムの適用は基本的には来春入学する学生からですが、現在在学している諸君にも、移行措置などによって、新しい制度のメリットをできるだけ享受してもらえよう計画しております。何よりも、学部を進化させるこうした強い力を在学学生諸君に感じ取っていただき、それを自らの研究や学生生活に生かしていただきたいと思っています。

II. 学部の自分探し—広報委員会の役割

学部広報委員会は、このような「進化する外国語学部」の力強い姿を学外に広く伝えるという役割を担っています。「広く伝える」だけでなく、時には他の委員会などとも連携しながら、学部の進化そのものを促進するよう

な場合もあります。広報委員会所属の学部教員は7名。この先生方が、入学センター（入試広報担当、八王子キャンパス）や広報・企画調査室（大学一般広報担当、三鷹キャンパス）などの事務組織と協力しながら、各種の企画を実行に移しています。特に本年度は、学部進化に連動する形でこれをどう広く伝えればよいのか、限られた時間や予算、人的資産の中で、高校生・受験生に学部の魅力を知ってもらうためにはどうしたらよいか、という点で、広報委員の先生方にはずいぶん知恵を絞っていただきました。全国の高校へのお知らせ、教員による学校訪問の徹底、学部独自のパンフレットやDVDの制作、学部教育の粋を集めた出張講義の実施、大学説明会企画の強化などは、その例です。全国の高校生を対象とした論文・翻訳コンテストも、学部創設以来はじめて実施したところ、予想を上回る応募がありました。本誌には、その受賞作や講評が掲載されていますので、併せてご覧ください。

このように、積極的な広報活動を展開していく中で改めて確認したり実感できたりしたことが少なくとも二つあります。一つは、本学部が社会に対して誇れる魅力や特質の再確認であり、もう一つは、入学してくる学生諸君が、一般にどのような高校生活を送り、どのような地域社会の中で育ってきたのか、という実情の把握です。こうした点から言うと、広報活動はある意味で、学部自体の自分探し、あるいはその位置確認に資するものでもあると思います。それが、この委員会の最も重要な役割であり、こうした活動を間断なく継続していかなければならない理由だと考えています。

III. 広報活動奮戦記

とはいえ、こうした広報活動には各種の困難が伴います。学部内で通常の教育・研究の水準を進化させようとしている時に、さらに

これに加えて学外に出かけていくわけですから、先生方の負担は当然大きくなります。また広報活動は、その性質から言って、費やした労力や経費とその効果とが必ずしも正確には比例しません。そして何よりも難しいのは、広報活動をする際、どのような教育が魅力的で有効なのか、ということをも単純に明言することはできないということです。教育の魅力、教育の有効性、といっても千差万別ですし、対象となる学生諸君の個性によっても異なります。そういう性質のものを画一的に喧伝したところで、社会の良識に抗うばかりでしょう。もちろん、ある程度の全体的方向性や一般的尺度を打ち出すことは可能ですが、しかし、全体的一般的であるがゆえにそれだけでは学部の個性にはならない—このあたりのところに、大学や各種教育機関の広報活動が、百家争鳴のあげくあまり効果の上がらないものに終わりやすい理由があるようです。

そうした中で私が今年度特に留意したのは、結局、次のようなことでした。すなわち、杏林大学外国語学部の魅力とその教育を支えるのは、個々のスタッフの人間力であり、その人間力が最も伝わりやすい広報形態を取る、ということです。マス・メディアに依存した垂れ流し型の情報伝達ではなく、求めに応じて直接、先生方に出かけていただき説明や授業を行ってもらおう、というものです。こういう手法は、あまりにも基本的で素朴であり、話題性には乏しいかも知れませんが、そういう手作りの広報には見向きもしない高校や予備校があったことも事実です。しかしながら幸いにも、今年度の活動を通して、少しずつにはありますが、そうした学部の人間力が高校を中心に広く社会へ伝わりつつあるのではないかと実感しています。もちろんそれがすぐに、例えば入学試験の受験者増などの効果に結びつくとは限りませんが、それでも、これまで学外にはあまり知られていなかった教育の質や教員の魅力、そして教育・研究へ

の熱意が、徐々に知られつつあるように思います。在学生諸君をはじめ、ご父兄の皆様、同窓会、教員や事務職員の人的ネットワークなどを存分に活用しながら、今後もさらに、進化する外国語学部の姿を伝える努力をして行きたいと考えています。言うまでもなくそのことが、学部の進化そのものを支えることになると思っています。ご父兄の皆様には、改めて、ご協力をお願いする次第です。

IV. 大学広報活動のゆくえ—高大連携の模索

高校（場合によっては中学）へ出張講義や訪問をしてみると、改めていろいろなことに気づかされます。なかでも私自身、少なからず驚かされたのは、少子化という社会現象の反映として、公立・私立を問わず、ほとんどの高校で入学時の倍率が限りなく一倍に近づいていること、効率化の影響か大規模校化が進んでいること、教育における個性重視が声高に叫ばれているにも関わらず、教室の態様や学校の形態、カリキュラムなどは存外画一的であること、などでした。一定の基準を設けて教育水準の維持をはかることはもちろん大切なことですが、人間の生活空間の多様性とそれを反映したコミュニケーションの豊穡さを探求する本学部の特質からすると、これは入学してくる高校生のバックグラウンドとして十分に考慮しておくべきことだと思います。逆に本学部から見ると、学部教育の多様さを広く伝える上で、格好の機会にもなりうるのではないかと考えています。教育において高校と大学が多様な形で連携する—これは既に文部科学省が示している、今後のわが国の教育のあり方に関する提案ですが、本学部も、高校をはじめとするさまざまな教育機関と協力しながら、次代を担う有為の人材を広く育てていくという姿勢を作っていくことが有効ではないかと思われまます。現在の広報活動が、学部教育のそうした長期的展望につながる第一歩になればと考えています。

高校生対象論文・翻訳コンテスト

論文部門作品紹介

2005年夏に杏林大学外国語学部主催の「高校生対象論文・翻訳コンテスト」が行われ、多数の応募を頂きました。論文部門では、厳正なる審査の結果、以下の通り優秀賞と奨励賞が決定いたしました。（論文コンテストの課題内容は、論文部門講評をご覧ください。）ここでは、論文部門の優秀賞作品を紹介いたします。

優秀賞	穂土史佳さん
奨励賞	三枝えりかさん

「言葉の感動体験」

穂土 史香

私にとって言葉というのは人と人を結びつけるための道具であり、人間関係を構築する上で重要な役割を果たしてくれるものです。言葉次第で相手を傷つけてしまうこともある一面、たった一言で相手を絶望のふちから救い出すこともできます。

中学入学後、英会話の外国人の先生と話したり、英語の授業を受けたりするようになり、私は次第に「外国に行ってみたい」という思いを強く持つようになりました。

ある時、優勝の副賞に外国のサマースクール参加がついた英語のスピーチコンテストを見つけ、何としてでも夢を叶えたいと一次審査のエッセーを提出しました。幸運にも一次審査を合格し、東京で開かれる二次審査に出場できることになりました。二次審査は、全国から選ばれた17名が壇上でエッセーに沿ってスピーチし、その後4人の外国人審査員と質疑応答した上で、優秀な男女1名ずつ選ぶというものでした。

スピーチコンテストに向けて必死に練習を始め、学校の英会話の先生にも猛特訓してもらいました。多少心配はありましたが、自分なりに頑張ったつもりでした。学校の英会話の授業でも大体の事は聞き取れるし、何人かの先輩から、「英語得意じゃないし話すのも苦手だったが学校卒業して大学に行ったら実は結構他の人よりも話せた。」と聞いていたので、大丈夫だろうとタカを括っていました。

しかし、実際本番になり、他の人のスピーチを聞いたとたん、そんな自信はガラガラと音をたてて崩れ落ちてしまいました。他の出場者は、帰国子女やインターナショナルスクールに通っている人たちばかりで、みんな英語がペラペラだったのです。スピーチを聞きながら「なんでこんな場違いな所にいるんだろう」と心細くてずっと震えていました。着々と自分の番が迫って来る中、今度は、次第に「みんな帰国子女とかで英語を話せて当然で、そんな人たちにわたしが勝てるわけないじゃん！不公平よ！」と腹がたってきました。

とうとう、私の番が来て、震える足で壇上にのぼり、私は恐る恐るスピーチを始めました。無理矢理笑顔をつくり、泣きそうになるのを堪えながら、凍りついた口元から、ひたすら単語を紡ぎ出していました。同じ広島から来た少年を視界の隅にとらえ、たぶん彼は同郷と思われるのを恥じているだろうと申し訳なさや恥ずかしさで一杯でした。頭が真っ白で言うべきことが、所々、抜けながら悪夢のスピーチが終わりました。続く質疑応答でも審査官の方々の言っている事が分からず焦ってしまい、逃げ出したい気分でした。質疑応答が終わり、席に戻りただただ呆然と椅子に座っていました。

いつの間にか全員のスピーチは終わり、結果発表へと移りました。結果は当然のように他の人が優勝でした。私は、悔しさと情けなさで泣きそうになってしまいました。そんな私のもとへ、コンテスト終了後、一人の審査

官の先生が来て手を差し出し、「You have a nice smile.」と声をかけて下さったのです。「残念だったね」ではなく、「君の笑顔はすてきだよ。」と。あんな悲惨だった私の中の発表から、その先生はちゃんといい所をみつけてくれたのです。そのたった一言で私は救われた気がしました。「全然ダメだったけど挑戦して良かった。」「もっと頑張ろう。」と思うことができました。

言葉はたった一言であっても人を温かい気持ちにもどん底な気持ちにもすることができます。そんな言葉の重みについて分かっていながらも、自分が辛い時に何気ない一言で相手を傷つけてしまうなどと、日常には自分の発する言葉によって様々な事が起こります。でも、あの日、私を力付けて下さった審査の先生のように、私にも相手を元気づけたり幸せにできるような言葉をかけることができるようになったら、すごく素敵だなと思います。

これからは、自分を磨きながら、人と人をあたたかくつなぐことのできる言葉を大切に生きて行きたいと思っています。

論文部門講評

外国語学部教授 金田一秀穂

論文コンテストの課題は、1. 国際化ってなんだろう 2. 言葉の感動体験 3. 行ってみたい国...旅のプランを考える 4. 世界に知らせたい日本の美しさ、という4つのテーマから一つを選び、2,000字以内にまとめるというものでした。これらのテーマは、若い人たちに、普段何気なく触れている言葉や文化の体験を改めて見つめなおし、自分の言葉で伝えて欲しいという気持ちから選ばれました。厳正なる審査の結果、応募された論文部門の作品の中から、優秀賞には穂土史佳さん、奨励賞には三枝えりかさんの作品が選ばれました。偶然にも、どちらも「2. 言葉の感動体験」について書かれた作品でした。

穂土史香さんの作品は、英語のスピーチコンテストの時の感動体験です。自信を持って参加したスピーチコンテストでしたが、行ってみると参加者は帰国子女やインターナショナルスクールに通っている人たちばかり。「悪夢のスピーチ」が終わってすっかり落ち込んでいる穂土さんを救ったのが審査官の「You have a nice smile.」でした。この作品では、スピーチに参加する前の自信に満ち溢れていた気持ち、スピーチ会場で他の上手な参加者を見てすっかり落ち込んでいる気持ち、スピーチ後、絶望から救われた時の気持ちと、穂土さんの気持ちの変化が飾らず素直に書かれていて誰もが共感できます。そして、最悪の状態を救った一言が、どんなに嬉しかったかが読者にも伝わってきました。「たった一言」が人を動かすということを私たちは忘れてはいけないということを感じさせる作品でした。作品の最初と最後には、論文のテーマと自分の主張がしっかりと書かれている点も、論文として評価されました。

三枝えりかさんの作品は、耳が聞こえないアメリカ人の男の子との言葉の感動体験です。三枝さんはある日、耳が聞こえないアメリカ人の男の子と出会います。彼となんとかコミュニケーションをとろうと身振り手振りで少しずつ彼に話しかけ、次第に打ち解けるようになります。ある日、聞こえないだろうと思いながら聞かせたバンドのCDに、彼がリズムに乗っていることに驚きます。そして、三枝さんはそのバンドのライブに彼を連れて行きました。その帰りに、彼が発した言葉が「ハンクー」(thank you.)。今までで一番嬉しかった「ありがとう」でした。この作品では、三枝さんがアメリカ人の男の子と出会い、苦戦しながらもコミュニケーションを取り、最後に「ハンクー」という言葉を聞くまでが感動的に書かれています。コミュニケーションは形ではなく、気持ちが重要であるということを改めて感じさせる作品でした。その気持ちが現れたのが、最後の「ハンクー」という言葉だったのだと思います。論文として論理的に自分の主張が書かれていれば更にはいい作品になるだろうという理由で、奨励賞に選ばれました。

最近言葉の味わい、感じるものが少なくなったように思います。一言の重さが、上手でも下手でも、心さえあれば通じ合うものだという事を改めて感じました。言葉の重みを、若い柔らかな心で感じ取れたことをとても良かったと思います。

翻訳部門作品紹介

「高校生対象論文・翻訳コンテスト 翻訳部門」では、厳正なる審査の結果、以下の通り優秀賞と奨励賞が決まりました。

優秀賞 菅沼あずみさん (翻訳部門 1)
奨励賞 田城久留美さん (翻訳部門 2)・築野真紗子さん (翻訳部門 1)
築野真紗子さん (翻訳部門 2)・三井麻衣さん (翻訳部門 1)
吉田知世さん (翻訳部門 1)・藤橋あやかさん (翻訳部門 1)

翻訳部門 1 課題 (英語または中国語訳)

それでも会いたかった
それでも近付きたかった
間違っているとわかってても
他に方法なんてわからなかった
もっとあなたを知りたかった
もっとあなたと喋りたかった
〈Sherrie、One (新風舎：2004) より〉

優秀賞 菅沼あずみさんの作品

Still, wanna see you
Still, wanna walk next to you
Nothing is gonna happen from now
But I just couldn't stop myself
Still, wanna see your inside
Still, wanna talk and laugh with you
That's what I wanted and still now...

翻訳部門 2 課題

When we came to Madrid, we being all of us strangers to Spain, were willing to stay some time to see the court of Spain, and to see what was worth observing; but it being the latter part of the summer, we hastened away, and set out from Madrid about the middle of October: but when we came to the edge of Navarre, we were alarmed at several towns on the way, with an account that so much snow has fallen on the French side of the mountains, that several travellers were obliged to come back to Pampeluna, after having attempted, at an extreme hazard, to pass on.

When we came to Pampeluna itself, we found it so indeed; and to me that had been always used to a hot climate, and indeed to countries where we could scarce bear any clothes on, the cold was insufferable; nor indeed was it more painful than it was surprising, to come but ten days before out of the Old Castile, where

奨励賞 田城久留美さんの作品

私たちがマドリードに着いたとき、われわれ全員がスペインは初めてだったので、しばらくの間スペインの宮廷を見たり、価値のあるものを観察したりして滞在したかったのですが、もう夏も後半だったので、私たちは急いで回り、10月の中旬にマドリードを出発しました。しかし、私たちがナバーラの端にたどり着くまでに、途中のいくつかの町で警告されたのです。それは、ピレネー山脈のフランス側では雪が大量に降っていて、ものすごい危険を冒してまでもその山脈を越えようと思って、試みたけれど、何人もの旅行者がパンペルーナに帰ることを余儀なくされたという説明でした。

私たちがそのパンペルーナに着いたとき、我々はその警告がまさしく本当だということがわかりました。そして、暑い気候やまさに何も服を着ないでもいられる国々に慣れていた私たちにとっては、その寒さは耐えられないものでした。また、たった10日前に古き都

the weather was not only warm but very hot, and immediately to feel a wind from the Pyrenean mountains, so very keen, so severely cold, as to be intolerable, and to endanger benumbing and perishing of our fingers and toes.

カステリア、そこは暖かいだけではなく非常に暑い気候でしたが、そこから来てすぐに、耐えられないほど非常に鋭く、あまりに厳しく冷たい山脈からの風を感じ、指やつま先の麻痺や腐敗の危険にさらされるというのは、驚きというより苦痛でした。

翻訳部門講評

外国語学部教授 黒田 有子

今回の外国語学部主催「論文・翻訳コンテスト」に高校生から30件の応募をいただいたことにまず御礼を申し上げます。昨今、若者の文学離れ・読書離れが声高に叫ばれる一方で、電子媒体などを用いた新しい形式での情報の送受信を通して読むことや書くことの喜びを実感している若い人たちが増えているように思われます。また、

大学のカリキュラム自体も読み書きよりもコミュニケーション重視に軸足を移す傾向がありますが、日常会話から始まる様々なレベルの言語表現の中で最も洗練されたものが文学作品であることに変わりはありません。今年折しもみすず書房から「理想の教室」シリーズの刊行も始まり、大学に入学する以前に育まれる文学や文芸に対する中高生の興味に対応していくべき大人の側の努力の必要性を多くの人を感じた時でもありました。杏林大学外国語学部でも、外国語学習の重要性と共に、人間が本質的にもっている「表現する喜び」と「先人が表現した文学作品を深く味わう喜び」を育むことの大切さを発信していきたいと考え、このような企画ができました。審査の結果、優秀賞ならびに奨励賞の受賞者は先に発表したとおりとなりました。受賞された皆さん、おめでとうございます。

翻訳部門の詩（和文英訳）の課題は、中学時代から詩を書き溜めていたという本学部OG（現在証券会社勤務）が昨年出版した詩集からの出題です。若い感性のシンプルな表現であるが故に、これが別の感性に反射して生まれてくるであろう様々な解釈や表現の可能性を探りたいという思いもありました。今回、中国語訳に挑戦した作品の応募はなく、英訳作品の競い合いとなりました。文法的に正しくない、あるいは語法的に問題があるものを除いて審査に残った四篇について見てみると、「間違っているとわかってても」の解釈は、“I knew it was wrong” “Though I knew I could not be your number one” “I guess I’m blind” “Nothing is gonna happen from now” とそれぞれに工夫されています。審査員の間では、より正確で忠実な訳であることと、原文の詩的エッセンスをつかんでいることの双方について議論を重ねた結果、個々に若干のずれはあるものの総合点においては別個ではありえないという結論に達しました。“wanna” “gonna” という表現についても異論はあったものの最終的には意見の一致をみました。

他方、小説（英文和訳）の課題は『ロビンソン・クルーソー』からの出題です。英文は平易な旅行記風ですが、ちょっと古風な文法事項も見られます。「マドリッド」「ナバラ」「ピレネー山脈」「旧カステリア王国」などの地名の理解や、地理的・歴史的状況についての一般的な知識を含めて手際よく処理ができているか、やや長い文章の中での時間的経過の感覚や空間的移動の距離感をうまくはかることができているか、というあたりが一つのポイントになりました。語彙では“court” “mountains” の誤訳や前述の固有名詞に不正確さがあるものを除くと、例えば“strangers” という語には「異国人」「初めてだった」「よそ者」「慣れていなかった」「不慣れな」「未知の場所で」など多様な訳が見られました。詩の場合と同様、審査員の間では、文法の問題、すなわち構文の正確な理解が出来ていることと、訳文のスタイルの問題、すなわち文章自体が翻訳としてこなれているかどうか—これは好みの問題もありますが、それだけではなく応募者一人一人のバックグラウンド、例えば読書量や海外体験なども含まれざるを得ないわけですが—この問題についても議論を重ねた上、総合点においては一致するという結論に達しました。

赤井ゼミナール

<言語文化を中心としたイギリス文化研究>

本橋 宏和

赤井ゼミナールの研究テーマはイギリス文学・文化についてです。私たち三年生は、『English Studies とはなにか?』というような英語のテキストを訳しながらイギリスという国や文化、人々の本質などを理解していく授業です。もちろん英文を訳すことで語学に関する知識が深まることや、例えば「English」という言葉の深さを知ること、イギリスという国にも差別があるということ、などを学ぶことが出来ます。私が一番印象に残った授業は、イギリス文学の本を読んでイギリスについて理解したことをまとめて、ゼミ内でプレゼンテーションをするという授業で、自分の調べた文学をみんなにプレゼンすることに、とてもやりがいを感じることができました。四年生は卒業論文作成のために個人指導を中心とした授業内容です。授業のペースは、休憩時間が必ず一度あるので、ゆっくりと学ぶことが出来るとても良い環境



です。また、春学期に行われる4年生とのコンパは、普段なかなか話せない先輩と就職活動や将来について話すことの出来る、充実のひと時です。来春には、自分たちが後輩と触れ合える機会なのでとても楽しみです。私は赤井ゼミナールにて、私たち自身の人間関係の大切さなども学ぶことが出来ました。これからも自分に甘えないように、ゼミ生、先輩、後輩と互いを高めて行きたいと思います。

伊藤ゼミナール

<英語字幕翻訳、ファンタジー、英語史研究>

前田 絵美

去年一年間はトルキンが研究した文献学についての本を訳し発表していく授業と、卒業論文の研究および発表を行いました。

英文を訳す際にはひとつひとつの単語の意味も時間をかけて細かく調べなければなりませんし、卒業論文のための研究では、資料の情報を鵜呑みにするのではなく、それが正しいかどうかを複数の視点から検証して判断しなければなりません。つまり、知識を与えられるだけの今までの勉強とは違う、本当の意味での勉強をすることや研究をすることを、ようやく学び始めたところです。ゼミに入ってから初めて経験することばかりなので、思うようにいかないことも多くありますが、その分やりがいも感じます。

また、授業中では話が脱線し、他の話題になってしまうこともあります。先生が話して下さる英語の世界



は興味深いものばかりで、ゼミの授業の楽しみのひとつになっています。

稲垣ゼミナール

<英語学・英語教育>

池田 隼人

have, make, get, let. これらは「使役」の意味を表しますが、このような使役を表す動詞はどのように区別して使うのか？ 直接話法の文、Mary says, "John, who is honest, never tells lies." と、間接話法の文、Mary says that John, who is honest, never tells lies. 実は意味が違っているのだが、直接話法や間接話法の文はどのように使われているのだろうか？ 英語の勉強をしていくうちに「この使い方がわからない」と感じるがよくあります。このゼミではこのような英語文法を主に扱い、疑問を解決していきます。ネイティブスピーカーが様々な文を実際にどのように使い分けているのか、それぞれの文がどのような条件のもとで適格となるかを文献を読みながら勉強しています。ゼミの稲垣先生は、英語文法以外に英語学・言語学を専門としており、技能としての語学を学ぶのではなく、英語という言葉自体を学ぶのであ



るから、とても興味深い分野です。

そして、このゼミの特徴として「サブゼミ」というものが設定されています。このサブゼミは、週一回TOEICの過去問題を解いていく授業を学生主体で行っていて、積極的な参加が求められます。普段自分ではなかなか出来ませんが、このような機会があることにより、TOEIC対策をすることが出来ます。

稲垣ゼミはまだ歴史が浅く定期行事なども確立してませんが、自分たちが稲垣ゼミを作っているんだという自負を持って毎週のゼミに臨んでいます。

今泉ゼミナール

<日本語文法研究>

井上 美佳

私たち今泉ゼミでは、『日本語の不思議探し』と題して、日本語の文法について勉強しています。日本語の文法と聞くと堅苦しく思われがちですが、私たちが勉強しているのは日常生活でよく使っている日本語を中心としたものです。先生が提示してくださった問題や、留学生が普段の生活の中で不思議に思った日本語のなぞを各人が考え、発表し、議論しながら文法的に解いていきます。後期からは、卒業論文のテーマ決めに取り組んでいます。

このゼミは日本人学生と留学生が入り混じった国際的なゼミです。私がこのゼミに入って感じたことは、日本人よりも留学生の方が日本語の文法を知っているということです。ゼミの中で飛び交う文法用語はどれもこれも初めて聞くものばかりでした。私は日本人なのに留学生より日本語のこと知らないなんて……と恥ずかしく思った反面、こんなに新しい発見があるのか！と興味がますます



今泉ゼミ史上1, 2位を争うかなりにぎやかな飲み会でした

ますわきました。

今泉先生は穏やかで研究熱心な方なので、私たちゼミ生も自分のペースで勉強に取り組めます。また、勉強にいきづまったときは、このように考えたらどうか？他の視点からはどうなの？など、手を貸してくださいませ。

自分たちの普段使っている言葉をきちんと見直してみることは、意外な発見もあり、とても面白いことなのだこのゼミで学びました。

岩崎ゼミナール

＜「ホスピタリティ・マネジメント」を基本課題に、企業事例や自治体の地域振興事例を調査研究する＞

高橋 綾一

杏林大学には現在4つの観光ゼミがある。その1つが我が岩崎公生ゼミナールである。当ゼミの活動理念は、2003年初頭小泉内閣総理大臣が国会施政方針演説で「観光立国宣言」を行ったのに伴い、観光という形態を通して国際文化交流の発展に寄与すること、そして、ゼミ活動を通じて観光交流を实践し、ゼミ生個々の人間的成長を図ることにある。研究テーマとしては、国内外の自治体またはNGOレベルでの「文化遺産、自然遺産の保全と再生」の取り組み事例や国内農山村漁村におけるエコツーリズム、グリーンツーリズムへの取り組み事例を調査研究している。主として行っていることは杏林大学が拠って立つ八王子に軸足を置いたうえで、他所の成功事例に学びつつ両者の比較調査を実施することである。これにより、八王子の眠れる観光資源を再発見し、同時に観光発展に向けての解決すべき課題を見出すことができるのである。当ゼミの年間を通しての最大の活動は秋の杏園祭での展示発表である。今年度は「千葉県南房総



地域との比較」をテーマに、現地での合宿や日帰りでの追跡調査を数回行った。そして今年度は八王子2大祭りのひとつである「いちょう祭り」に杏林大学からは初めてとなる出展参加を行った。このように当ゼミでは、学校外での活動にも積極的に参加している。今年度で当ゼミは6年目を迎え、活動の裏には先輩ゼミ生の存在がある。在校生だけではなく卒業された先輩方も時々いらしていただき、アドバイスをくださる。そして冒頭で述べたように杏林大学には、現在4つの観光ゼミが存在する。他の3つのゼミとの懇親を深める為の合同懇親会も行っている。我が岩崎ゼミナールでは、先輩・後輩という縦の関係だけではなく、こういった横の関係も重要視している。これらの活動は、すべて学生が主体的に行っている。つまり、先生から「やらされている」のではなく自らの意思を持って自主的に活動していることが最大の魅力である。

江戸ゼミナール

＜オセアニア地域（オーストラリア、ニュージーランド、ハワイなど）の文化や民族についての研究＞

小倉 陵平

現在、江戸ゼミナールは、四年生六名、三年生四名の計十名で活動しています。私たち三年生は四名と少人数で、しかも全員がオーストラリアに興味があったということでオーストラリアの先住民?アボリジニ?について学んでいます。アボリジニの文化・歴史に関する書物を読み、それを自分の言葉でまとめ、発表するというのが主な授業の内容です。

うちのゼミの江戸先生は、物事をはっきりとおっしゃる方です。発表時にも日本語の文法等におかしいところがあれば指摘し、直してくれます。江戸ゼミでは、オセアニアに関するだけでなく、英語はもちろん日本語の表現についても学ぶことが出来るのです。江戸ゼミでは先生を含めて、全員で食事に行く時があります。よ



登山をした入笠山の山頂にて

く中華料理屋さんを利用しています。

また夏休みには合宿にも行きます。今年は長野県の八ヶ岳へ行きました。ここも先生のおすすめの場所です。本当に自然が豊かで、東京と違って涼しく、とても過ごしやすい所でした。今年は、縄文時代の遺跡や土器を見に行ったり、入笠山に登ったり、また、温泉に入ったり、夜は花火もしました。今年は、行きのバスに先生が乗り遅れるという軽いハプニングはありましたが、本当に楽しい三日間でした。

今後は、自分が興味を持った分野についてより深く研究を進めていく予定です。その為、もっとアボリジニに関する知識を深めていきたいと思っています。

木崎ゼミナール

<接客業における顧客接点人材についての研究>

私達、木崎ゼミナールは秋学期から開講しました。今期のメンバーはまだ4人ですが、来年4月からは新たに25人の仲間を迎え、賑やかなゼミになりそうです。

私達、木崎ゼミでは、「顧客接点人材」をテーマに多角的に研究しています。サービス産業を中心としたホスピタリティについて学ぶので、私達は「優しい人になる！」という事を最終的な目標に掲げています。

今期から始まったばかりなので、今は、「木崎ゼミのValue とは何か？」を毎回ディスカッションし、その価値を共有する作業を進めています。「優しい人」をKEYWORD に話し合っており、我々が大切にすべき概念は「優しさ」・「信頼感」・「協調性」・「素直さ」ができています。これからも更に掘り下げていく予定です。

既に企業見学も実施しており、JALの客室乗務員の訓練施設への見学も行いました。日常生活では体験できない貴重な体験のできるゼミです。客室乗務員が真剣に訓



練に取り組む姿を見ることができ、自分が航空機を使う時に見ている所とは違う側面を見ることができます。

木崎ゼミでは各自が参画意識を持ち、自分にとって必ずプラスになるゼミです。来年から加わる25名と私達4名の合計29名と木崎先生とで明るく楽しく、全員でゼミを盛り上げていきたいと考えています。

金田一ゼミナール

<日本語の意味の違いの発表>

例えば、誰かが不意に、「意外」と「案外」ってどう違うのか知らん？同じではないのか知らん？と疑問に思うとします。たいていの方が、こういう問題について不図疑問に思ったことがあるでしょう。けれども、多くの人はそんなことを長々と悩み続けたりはしない。十五分もすれば、夕飯の献立のこと、株価の変動、来月の合コンのこと、隣のクラスのよっちゃんのこと等、様々なことに思いを廻らせ、そんなことなど忘れてしまうのでしょう。いわば、「意外」と「案外」がどう違うか、なんて問題は路傍の石のようなもので、気まぐれに目を留める人はあっても、じっくりと調べる人は数少ない。

しかし、私たちの身の回りにはそんな石が沢山転がっていて、その中には結構重要なものや考えるに値するものがあります。このような日常に埋没している言葉の意味を調べ、吟味し、熱く議論を交わすのが我が金田一ゼミの活動です。普段何の気なしに使っている言葉の意味



を、改めて整理するのはなかなか難しく、非常に面倒な作業で、辞書を片手に唸ってみても、授業で皆と喧々囂々議論をしても、いまいち判然としないことが縷々ある。いかに我々が普段コトバというものを恣意的に、感覚的に使っているか思い知るのであります。それでも、先生の博識、茶々、合の手、我儘、等に助けられ、どうにかこうにか結論を得ていくのであります。普段は飄々としている先生も、そういうときはさすがなもので、言語学者の面目躍如といった感じであります。

そんな金田一先生のもと、私たちは学問の道を邁進していくのであります。

草場ゼミナール

<日本語史、日本語教育>

許 春花

私たち草場ゼミナールでは、卒業論文を書くのに必要な言語学的基礎を学ぶと同時に、グループ学習などを通じて、教師とは何か、教育とは何かを学び、教師に必要な社会性を身につけるための目的で行います。大学卒業に際し、卒業論文は誰もが書かなければならない重要な課題であります。しかし、卒業論文を書いたことのない私たちにとっては、どの研究テーマを掴んでどう研究していけばいいのか迷っています。先生は、こんな私たちが早めに研究テーマを掴んで書き始めるように一人一人を親切に指導してくれます。授業は毎週月曜日の5限目に先生の研究室で行います。教室での重々しい雰囲気とは違って、研究室では、ゼミ生みんなが気楽に座って先生が出してくれるお茶や、コーヒーなどを飲みながら授業は進んでいきます。こういった和やかな雰囲気の中で、ゼミ生たちは自分が研究しているテーマを自由に発表し



たり、議論したりして、先生はそれに対する修正やアドバイスをしてくれます。また、ゼミ生のほとんどが留学生なので、未熟な日本語も先生はその場ですぐ直してくれます。これは、私たち留学生にとって貴重な日本語勉強の時間にもなります。それに、毎週の土曜日と日曜日は個別指導があって、ゼミ生たちは自分の都合に合わせてながら受けています。個別指導は先生のお宅で行います。先生のお宅では、本当に自分の家のようにリラックスできて、いい学習環境になります。そして、ほとんどが一人暮らしの私たちに、先生は手料理までご馳走してくれて、勉強はもちろん、お腹までいっぱいになります。

楠家ゼミナール

<比較文化論、対外交渉史、日本近現代史>

中城 美奈

楠家ゼミは人数の多いゼミです。4年生は30人ほどですが、3年生は50人くらいおられます。ふだんの授業には大体20人ちょっと来ます。

このゼミのテーマは外国人がどのように日本を理解しているのかということです。明治時代のイギリス人日本学者 B.H.チェンバレンの代表作“Things Japanese”を読んでいます。分担にしたがって、私たちが英文を日本語に直します。重要な項目や言葉について調べて、発表します。その後、先生が時代や文化の背景を説明してくれます。「そろばん」の項目では、なぜ日本人と外国人とで計算能力が違うのか話題になりました。むかし西欧人はローマ数字や12進法を使っていたので、代数より幾何学が発達したんだそうです。日本人はアラビア数字と10進法を用いていたので、計算がかんたんにできるの



です。このように毎回、私たちの雑学が増えていきます。そして、質疑応答が始まります。

夏休みのまえにコンパがありました。かなり和気あいあいの雰囲気で、新たな友人がふえました。面白い人がたくさんいました。また先日は横浜に行ってきました。昔そこには外国人居留地があり、そこから西欧の文化が日本に入ってきました。パン、アイスクリーム、街路樹、新聞などなどです。もちろん、中華街でおいしい夕食をいただきました。

熊谷ゼミナール

<情報社会の社会問題—日米比較を中心として—>

松本 翼、渡部 尋貴、増井 亮子

杏林外語で最難関と定評の熊谷ゼミ。正直言って勉強は大変である。しかし私たちはそこから数え切れないほどのことを学ぶ。ゼミでは、自分が将来就きたい業界や興味のあることを研究テーマとすることができる。それを論理的に考え、英語で書く。さらに、パワーポイントを使いながら、英語で一時間のプレゼンテーションをする。それにより、第一にそのテーマについて詳しくなる。第二に、論理的思考力がつき、説得力がもてる。第三に英語能力の向上。第四に、パソコンスキルが身につく。

前期は「Taking Sides」というアメリカの社会問題を取り上げた英語の教科書を使う。毎週二十ページほどを読破し、英語能力の向上とアメリカの社会問題の理解を深める。後期は自分が興味を持つテーマに関し、約一時間で英語プレゼンをする。このときにパワーポイントを使うので、必然的にパソコンスキルが身につく。実際



に英語で一時間のパワーポイント・プレゼンをするまで、誰一人としてそれが可能とは考えもしなかった。しかし、それをやってのけた自分を誇りに思う。また毎週時事問題などを取り上げ、自分の意見を発表する。ここでも論理的思考力が鍛えられる。春と夏に合宿を行い、ゼミ生同士の親睦を深める。夏合宿は、静岡にある禅寺で座禅や御法話など、日本の伝統文化に触れることができる。さらに今年から、ゼミ生が主体となってゼミブログ(KSB)を始めた。

本当の意味で厳しく、温かいゼミである。授業中は真剣に勉強し、休憩時間は先生と笑って話す。ここで培った力は、将来絶対に役立つ。

黒田ゼミナール

<アメリカ文化と日本>

村田 有美

私たち黒田ゼミでは、アメリカ文化について勉強しています。英語で書かれた本を、ゼミメンバーそれぞれが訳しながら読解し、英語の力を付けつつ、同時にアメリカの様々な歴史や文化を学んでいます。また、黒田ゼミでは、TOEICや英語検定などの受検を義務付けており、常に学生の英語力を伸ばすことを重視しています。参考書の貸し出しも行っているため、参考書を持っていない学生もいつからでも試験勉強に挑戦することができます。もちろん、参考書以外にも、研究室に置いてあるすべての本が貸し出し可能です。

また、ゼミのメンバーは、学年を問わず和気あいあいとしています。春学期には4年生による3年生の歓迎会が行われ、親交を深めました。夏休みには箱根で3年生と4年生合同のゼミ合宿を行いました。合宿では、4年生の卒論中間発表と3年生の課題発表が設定され、緊張



した時間を過ごしましたが、夕食後の親睦会では思い切り楽しみました。10月の杏園祭では、ゼミ恒例のフランクフルトの模擬店を出しました。皆で協力して、2日間とも完売し、最高の達成感と思い出を得ることが出来ました。今ではゼミ生全員が強い絆で結ばれています。このように、黒田ゼミは、勉強する時はしっかり勉強し、楽しく過ごす時はとことん楽しむメリハリのある充実したゼミナールです。

小山ゼミナール

<日本論・中国論等々>

小谷野知保

「東アジア研究」。この一言だけを聞くと、「東アジアってなに？」そう思う人は少なくないだろう。ゼミナール紹介ということなので、もう少し具体的に言っておこう。「毎時間、ゼミ生全員が共通の本を読み、各国人としての自分の意見や感じたことを発言、それを通じて、日本・中国・台湾・韓国の文化を研究している。」これで当ゼミナールの活動の八割方がわかっていただけたと思う。

当ゼミナールは、優しく楽しい小山先生の下、日本、中国、台湾、の3つの国・地域出身の学生が集まった多国籍ゼミナールである。ちなみに3年・4年合同の混学年ゼミナールでもある。育ってきた環境も国も年齢も違う24人が自分の考えを発言するわけであるから、毎時間がお互いについて、またお互いの国についての新しい発見の連続である。



東アジアといえば、皆様もご存知の通り、昨今、暗いニュースが多くなっている。しかし、ゼミ生同士は非常に仲が良く、ひとたびアルコールが入ると、国籍も年齢も関係なく先生まで巻き込んでの恋愛相談やペット自慢が始まる。このゼミナールは、とにかく、飲み会が大好きなゼミナールで、春夏秋冬の季節の飲み会に加え、送別会、歓迎会、忘年会等事あるごとに集まっては食べて飲んで騒いでいる。

以上のようにやる時はやり、遊ぶ時は遊ぶ。「メリハリを大切にせるゼミナール。」それが当ゼミナール、小山ゼミナールである。

諏訪内ゼミナール

<国際人 新渡戸稲造研究>

杉村 悠太

みんなゼミをどんな基準で選ぶのだろうか？就職に有利、興味ある分野、面白い先生・テーマ、友達が取ったから・・・なんて理由もあるかもしれない。自分がゼミナールを取った理由は自分の予定を最優先できるから(笑)とか、『武士道』を読んだことがあったからとか、まあ、そんな深い考えのない選択だった。が、私は現在この文章を卒論データ収集の北海道旅行の帰りの機内で書いていたりする。卒業論文選択の外国語学部でここまで卒論データ収集を熱心にする学生はなかなかいないだろう。北海道大学の教授には非売書籍までお借りしてきた。

あえて、ここでは新渡戸に関して深く語らないことにする。なぜなら新渡戸は一言では語りつくせない。なぜなら、農学者・法学者・教育者など多方面に活躍したからである。しかし、『武士道』だけでなく、新渡戸の半生を学べば、新渡戸稲造とは、過去のジョン万次郎や、福



沢論吉など日本的視点にたった国際人でなく、枠にとられない国際主義者であることがわかる。

その結果、新渡戸は数々の偉業を成し遂げた結果、アジア人でありながら初代国際連盟（国際連合の前身）事務次長という大役に任命されたのだ。

実は私もつい最近知ったが、新渡戸稲造はドイツから日本にゼミナールという言葉を持ち込んだ張本人でもある。海外に興味ある学生は、実は「ゼミ」の生みの親でもある新渡戸の研究を通し、国際主義者について学んでみてもらいたいと思う。

詹ゼミナール

<中国古典研究>

村田真紀子

単刀直入、わが詹先生が率いるゼミナールの活動内容は、漢文を読むことです。平たく言えば、大昔の中国人(だけではない…)が残した詩を読むことです。と、言うことは…全部中国語で書いてある…?…そうです、これを巷(詹ゼミナール)では漢字地獄といいます。「と…とっつきにくい…」と思うなかれ、中国語で書かれてはいるけれども詩であったり、物語なのです。私たちが普段読んでいる小説や漫画本と同じなのです。(…ただ…全部漢字なだけで)しかし苦戦を強いられても大丈夫、詹先生完全フォロー!さて、我々は先人の魂を汲み取ることができるのか?

盛り上がってまいりました…先程登場した当ゼミの長、詹先生とはどのような方なのかを一言で申し上げるならば、「漢詩オタク」、欲張っていうと「明るい漢詩オタク」ということになります。よく笑っておられ、活字に



あらわすと「あははははははっ!!」、瞬く間に教室中に響きわたります。詹先生その「お人柄」が詹ゼミ生の「おゼミ柄」としてよく反映されているのではないのでしょうか。

きれいにまとまったところで最後に…授業中にしばしば本題からの脱線を招いてしまう詹ワールドを私の記憶の範囲でお楽しみください。では。

『詹語録』:「毒がなくなったら文学は死ぬ!」「自分がどう生きたいかなんてわからない。自分にどんな生き方があるか試しながら生きることが楽しい!」「すぐに役立つ技術はすぐに役立たなくなる!」「…やっぱり日本語が一番難しいよ…」

高木ゼミナール

<プレゼンテーションスキル、論文執筆に必要な英語力の養成、TOEFL、TOEICテスト対策>

植竹 愛、藤村 美穂

私たち高木ゼミは、各自それぞれ自分の興味のある分野について研究しています。私たち三年生の研究テーマも各々で「ピーター・ラビット」について研究する人もいれば、「太宰治」について研究している人もいます。私たちが今まで生きてきた中で特に関心を持った事を皆、一生懸命研究しています。

高木ゼミでは、卒業論文を英語で書きます。英語で論文を書くという事はとても大変な事ですが、授業中に先生が文献の調べ方や、英語での表現の仕方を教えて下さるので、英語が苦手なゼミ生も、しっかりと英語で論文を書くことができます。また、英語で皆に発表することは、日本語で意見を伝える事よりはるかに難しいという事がわかります。しかし、英語を使ったプレゼンテーションにより、私たち、高木ゼミ生のプレゼンテーション



能力は倍増しました。プレゼンテーション能力を付けるということは、学校生活はもちろん、社会に出ても欠かせない事だと思います。この他にも英語でのディスカッション、TOEICの問題演習、映画鑑賞など様々なことを行っています。

英語のスキル、文章力を高めたいと思っている人には、このゼミはおすすめだと思います。ゼミ生同士の仲も良く、お互いに励まし刺激しあいながら卒業論文の執筆に取り組んでいます。大学生活の中での努力を形として残すことができる、それが卒業論文だと思います。研究をするにつれ今まで知らなかったことが分かるというのは、とても楽しいことなので、大学時代の知識を広げ深みをもたせたいと思う人は是非いらしてください。

田中ゼミナール

<英語音声学及び英語力強化>

田中ゼミナールには現在三十二名のゼミ生が在籍しています。このうち二十五名は四年生で、七名が三年生です。今年の三年生からゼミの内容が変わりました。音声学をメインにしていた昨年度までとは異なり、今年度からはゼミ生の英語力強化に重点を置き、その中に英語音声学を応用した発音指導を含むようになりました。

読む力、聞く力、書く力、話す力を総合的にアップさせるために、毎週多くの課題が出ます。特に、聞く力や話す力の基礎となっているのは読む力であるということをいつでも忘れぬよう、さまざまな文章を正しく読んでいく作業には特に力を入れています。また、毎週課されるディクテーションは、細かい音までできる限り正確に聞き取ることに重点を置いており、これが自分の総合的な英語力の判断材料となります。定期的に英語のみで話し合う時間を設けて、自分の意見を躊躇せずに英語で表



現する練習も行っています。今年は二月の寒い時期に二泊三日の「英語漬け合宿」を予定しており、現在その準備を進めています。

外国語の学習は少しずつでも毎日続けることが大切で、すぐに結果を求めようとする安易な姿勢を改めることから始めなければなりません。さらに、留学すれば自然に英語力がアップするなどという間違った考えを棄てることがなにより重要であるということも忘れてはならないポイントとして、田中ゼミでは幾度となく強調されています。

玉村ゼミナール

<日本語の語彙・意味>

玉村先生のゼミでは主に、日本語の語彙・意味について勉強しています。ゼミでは最初のうち、論文・著書が自分で探せるように、図書館にある参考文献の利用方法について指導を受けました。まだ、学問に慣れていなかった私達にとっては、本を読むことの楽しみを知るきっかけにもなりました。

語彙の世界は生活や文化を反映していることが多いと言えます。日本人にとっても外国人にとっても語彙研究は易しくないですが、とてもおもしろいです。「そう」「よう」「らしい」「みたい」の差違、接尾辞「中(ちゅう)」「中(じゅう)」の違い、単独動詞・複合動詞の連用形から成る転成名詞(例：願う一願い、とび降りるーとび降り)などについて研究しています。その他にも語の構成、意味論、意味変化などについてもたくさんの知識を身に付けました。

日本語研究は少し難しいところもありますが、日本語



の外形だけではなく、本質的な部分にまで深くつっこんだ考察をするのでとてもおもしろいです。テーマに関する重要な文献を読み、グループに分かれて検討し、自分達の言葉でまとめて

発表します。その後、先生から問題点が指摘され、それについて私達は自分の頭で考え、自分の考えをプレゼンします。ディスカッションでは、先生・ゼミ生全員で議論しながら理解を深めていきます。終始活発な空気に包まれているのですが、ファミリーみたいな和やかな雰囲気がありますから、とても楽しいです。自分にはない発想・着眼点などを知ることができる点で、日本語教師を目指す私達には、とても勉強になります。

塚本ゼミナール

<中国の言語・文化・社会の諸事象の研究>

村田 瑠欣

私達塚本ゼミは塚本先生の指導のもと、中国語の向上をめざし、中国文化について研究をしています。ゼミのメンバーは、4年生が13人、3年生が15人、計28人です。時には、普段の生活の中で、私達日本人学生が気に留めない様な疑問を留学生が見つめてくることもあり、それについて議論したり、日本と中国の文化の違いを比較したりしています。

杏園祭では、みんなが一つになり中国語を使つての劇を完成させました。3年生は、舞台上上がり、4年生は同時通訳を行いました。始めた頃は、発音が悪かったり、なかなか役に入れず、苦戦していましたが、留学生による発音の指導や先生の熱のこもった演技指導により、当日はすばらしい劇を仕上げる事が出来ました。この劇を通じて、語学の向上だけでなく、仲間内でも壁が取れて何でも話せる仲になりました。

豊田ゼミナール

<英語教育・第二言語習得・教材開発>

山口美菜子

私達、豊田ゼミでは主に幼児英語教育について学んでいます。三年生の時には幼児英語教育の基礎を学び、教材にも触れます。教材は絵本や音が出るおもちゃ、歌など様々です。四年になると研究テーマや進路について個々に活動します。まだ新しい豊田ゼミは少人数ですが明るく楽しいゼミです。

今年の夏休みには初めての合宿を行い、3・4年生合同で福島県のブリティッシュ・ヒルズを訪れました。ブリティッシュ・ヒルズとは「日本の中のイギリス」がコンセプトの宿泊施設です。施設内では挨拶から買い物まで全て英語を使用し、食事や建物はイギリス様式になっています。まるで映画のような食堂や重厚な内装の建物、また温水プールやパブなど様々な設備がある素晴らしい環境でした。宿泊客は自分の好みに合ったクラスを取って、イギリス文化と英語を学びます。私達はクッキング、



杏園祭で騒いだ後に、私達を待ち受けていたのは・・・卒業論文のための準備でした。最近、論文の書き方練習として先生から与えられた課題に、皆、必死になって取り組んでいます。杏園祭の時とは、まったく違う良い緊張感が、毎週ゼミ室を包み込んでいます。このゼミの大きな特徴として、色々な視点や観点から皆が意見を言い合える中にも、しっかりはじめを付けて活動をしているところがあげられます。留学生も多くいるので、まさに国境を越えた交流の毎日です。



ウェディング、クラフトの三クラスを取りました。常時開放されているラウンジでは勉強会もすることができました。英語を学ぶ学生はこのような場所を積極的に利用すべきだと思います。学習の環境をかえて行う合宿は自ら行動して学ぶことが数多くありました。

このゼミにはまだまだはじめて、に挑戦する機会が沢山あります。今後もチャレンジ精神旺盛で元気な後輩が増えれば、と思います。

鳥尾ゼミナール

<インバウンドツーリズム研究>

荒井めぐみ

「観光とは光を見ることである」これは、私たち鳥尾ゼミナールの原点です。中でも、インバウンドツーリズムをテーマとし、日本の見られるべき光とは何であるのかを研究しています。私たちはまず、日本文化を知ることから始め、それら日本文化こそが観光価値であると考えました。夏合宿では日本文化が凝縮された京都と飛騨高山へ行き、それらを通じて私たちが感じた光を話し合いました。そしてその光は「体験価値」である。つまり「体験することこそ価値である」という結論に至りました。

現在は、「観光とは何か」その本質を迫及し、実際に使えるパワーポイント作りに取り組んでいます。私たちのゼミのモットーは、自主・自助・自発です。毎回のゼミでは、一人ひとりが自主的にテーマについて取り組み、自発的に発言し、主にディスカッション形式で研究を進



めています。ゼミの時間はまずお茶を配り、とても和やかに有意義な時間を過ごしています。

このゼミは実践ゼミでもあるので行事も多く、企業訪問を始め、合宿やスポーツ大会、親睦会などゼミの時間外でも楽しい日々を過ごしています。最近では大学内の他の観光ゼミとも交流を深めています。私たちのゼミナールには、同じ目標に向かって共に努力し、楽しいときは一緒に笑い合えて、悩んでいる時には相談し合える、そんな仲間がいます。困った時にはアドバイスを下さる優しい先輩方もたくさんいます。そして私たち学生と真剣に向き合って下さる鳥尾先生がいます。このゼミの一員であることを幸せに、そして誇りに思っています。ぜひ、そんな鳥尾ゼミナールの光を覗いて下さい。

中村ゼミナール

<敦煌出土の禅家語録講読>

今から約百年前、西暦一九〇〇年、中国西安のはるか西の砂漠の中、敦煌の石窟からおびただしい数の写本類が発見されました。いわゆる敦煌文書です。この中に唐代の禅宗の僧の言葉の記録が含まれています。このゼミでは、この唐代の禅家語録を、荷沢神会（六八四 - 七五八）の語録を中心にして読み進めています。

現代中国語では、疑問詞「何」は「如何」などごく限られた語にしか使われません。「なに」という意味をあらわすのは「甚麼（什麼）」ですが、この語が現れるのもこれら禅家語録の中が最初です。当時の口語を大いに反映しているのが禅家語録の特徴のひとつです。

禅の教えは、菩提達摩（磨）によってインドから中国に伝えられ、さらに日本へ鎌倉時代に伝えられました。語録を読みながら、現在の日常生活の中に活かしている禅の思想や、背景にある仏教に関する基礎的語彙も理解し



てゆきます。

近年、中国人留学生が参加してくれるようになって、現代中国の宗教的習俗などについて解説してもらえるのが楽しみです。

長谷川ゼミナール

<ドイツ語圏地域研究>

北島孝太郎、福森暁、茂木沙都実、渡邊真理

ドイツの歴史、文化、思想、政策などを学んでいます。各自それぞれのトピックを担当し要約して、授業で発表します。また、就職対策として、毎週作文を提出し作文力を高め、授業開始10分間にSPIのチェックテストをし、最近では、パワーポイントを導入してプレゼンテーションをするなど発表力を養っています。サブゼミでは、SPIとコンピューターの勉強をしています。どちらも、これからの就職活動に役立つのはもちろん、特にコンピューターは社会に出てからも、必ずといっていい程、必要になります。だからこそ、これらのこともしっかりと勉強しなくてはならないと思います。また、今年は二泊三日で箱根に旅行に行きました。ロープウェイで大涌谷を見学し、フットサル大会をして温泉でリフレッシュしました。水族館でアザラシを見たり、飲み会をしたり、有意義な内容になりました。一番印象に残ったことは、



二日目に行われたフットサルです。皆一緒になって一つのボールを追いかけました。普段とは違ったゼミ生の姿を見ることができ、一段と絆が深まったような気がします。杏園祭にも参加し、ドイツワールドカップなどについて展示しました。それらに加え、二日目にはパワーポイントを使って各自研究成果を発表しました。パワーポイントは作り上げるのも、発表するのともとても大変でしたが、発表を見に来てくれた友人に聞くと、とてもよくできていたと言われ、やってよかったと思います。

原田ゼミナール

<イギリスを中心とする文学・比較文化・翻訳論研究>

原田ゼミナール広報委員

私たちのゼミナールでは、イギリス文学について学んでいます。通常の授業では、イギリス文学について英文で書かれたテキストを順番で訳しています。もちろん、英文を訳すことは英語の勉強になりますが、それだけでなく、文学史、社会情勢について学ぶことができます。現在は、Shakespeareの喜劇や悲劇、例えば『ハムレット』『リア王』などの作品や歴史的背景を学んでいます。

原田ゼミナールでは、春と夏に研究合宿を行います。イギリスに関することの中で、自分をもっとも興味を持っていることに関して卒業論文を書くのですが、この合宿では、一人一人卒論研究の途中経過をプレゼンテーションし、研究を進めるための意見交換も行います。プレゼン後、先生・先輩方からも意見が頂けるので、自分の研究をより良いものへと進めることができます。

ゼミでは、メーリングリスト(ML)というものがあり、



以前原田ゼミに在籍していた先輩方とも交流することができます。このMLは先輩方からの貴重なご意見を伺えるだけでなく、メールひとつ送るにしても、礼儀や敬語の使い方など、社会のマナーを学ぶことができます。

ゼミの時間以外にも、親睦会があったりなど、学校以外での交流もあるので、仲良くとてもにぎやかなゼミナールです。

Parochetti ゼミナール

<アメリカ大衆文化（映画・TV・広告等）比較文化>
YOSHIMI Kishi

私たちのゼミの先生は、パロケッティ先生です。先生はいつもニコニコ笑顔で教室に入ってきます。私たちは毎回、先生のあたたかい空気を感じながらゼミを始めました。

パロケッティゼミナールでは、みんなで **pop culture** について学びました。このトピックはとても幅広く、私たちはみんな興味あることは違いました。しかし、みんなで1年間かけてさまざまな **pop culture** を共に学び、そのことは自らの興味をさらに深め、また新たな発見を得ることに繋がりました。はじめの頃は、調べることに慣れていなかったり、英語でプレゼンテーションする力がなかったりと、不安なこともたくさんありました。しかし、そんなときも先生は変わらず笑顔で褒めてくれたのを覚えています。私たちは反省すべき点を自分たちで見出し、自信を先生からもらっていました。



学園祭では、先生の故郷であるアメリカの国民食、ホットドックと日本の大根おろしをコラボした **daicon dog** を発明しました。食の面でも **pop culture** は忘れません。ゼミのお食事会の多くは、普通の居酒屋ではありませんでした。自分ひとりでは体験できないようなことを、体験し、そして知りました。

先生はいつも、笑顔で“see you”と言って教室を出て行きました。課題と共に残された私たちもまた、いつも笑顔でした。

古本ゼミナール

<観光現象について広く「学び」「考える」>

鳥羽 智史、篠田 愛

私たち古本ゼミナールは今年度4月に新しくできた観光を研究するゼミです。毎週のゼミでは、交代で各々の研究の進み具合を PowerPoint のプレゼンテーションやレジュメを作成した上で、発表しています。はじめは6人という少人数で研究をしていましたが、今では留学生の仲間が増え12人となり、観光だけではなく、異文化についても学びながら、毎週にぎやかにゼミが行われています。

9月には神戸・大阪に2泊3日の合宿に行き、大阪府・ユニバーサルスタジオや兵庫県・有馬温泉を見学しました。また、来年2月には次年度からのゼミ生と一緒に群馬県新治村に調査を兼ねた合宿に行き、研究発表会をする予定です。具体的な研究内容としては、観光地の開発やテーマパークの経営、プライダルといった、多岐にわ



たったテーマで進めています。また今年の杏園祭では、メンバーのひとりが今研究を進めている「夜景」にスポットをあて、外国語学部のある東京都八王子市周辺の夜景スポットをリストアップし、自分たちの目で確かめた上で、写真を撮ったり、周辺情報を集めたりしてガイドブックを作り、その配布や写真の展示を行いました。

自分たちの研究のほかにも、ゼミ全体で観光地の振興策について学んでいます。今年は東京都葛飾区をフィールドとして調査を行いました。今後はさらにその内容を深めるとともに、八王子市の地域振興についても積極的に研究を進めていこうと考えています。

本田ゼミナール

<異文化理解とコミュニケーション>

山本 若葉

私たち本田ゼミナールでは、「異文化コミュニケーション」を主なテーマとして活動しています。ゼミ生の約半分が留学生なので、学生同士が異文化をととても身近に感じられます。今まで自分たちが意識していなかったことが、他の国の人たちから見るととても信じられないことだったり、驚くことだったりして、たくさんの発見があります。このことから私たちが自分たちの国や生活習慣や文化の中で狭く生きてきたということがよくわかります。このことに気づくことが「異文化コミュニケーション」への第一歩なのです。

先生はよく、私たちに「アルバイトをしてお金が余ったらいろいろなところへ旅行をきなさい。」とおっしゃいます。いろいろな場所へ行って、異文化に自分の肌で実際に触れることが大切だということです。確かに自分の生まれ育った地域だけで過ごしては異文化は感じら



れません。自分で異文化に気づき、理解することが大切なのです。

異文化は国内にもたくさんあります。例えば同じ日本人同士でも言葉が違ったり(方言)、お正月のおせちの作り方が違ったり・・・たくさんあります。これも異文化なんだと私はこのゼミナールに入って感じました。

「異文化コミュニケーション」を身につけるといことは、いろいろな場面で役にたつと思います。就職活動や、普段の生活、もちろん日本語教師になりたい人にも身につけておけば絶対得です。最後になりましたが、私たち本田ゼミナールは、先生と学生がととても仲が良いゼミナールで毎週とても楽しく活動しています。

MCMillan ゼミナール

<歌詞・詩・童話・小説等の創作>

埜 佑紀

マクミランゼミナールの紹介をします！私たちマクミランゼミナールは16人(男子6人、女子10人)のメンバーで、杏林大学教授ピーター・マクミラン先生の指導のもと、英語の詩や、百人一首などの詩を研究内容として活動を行っています。活動内容は主に詩の研究や翻訳、自作詩(さまざまなテーマを用いて自分で作成した詩)を作成して、ゼミの時間に発表し合って、さまざまな詩の世界をメンバー全員で研究しています。そのほか、ゼミ合宿を行い、主にマクミラン先生の別荘がある山中湖(山梨県)に行き、ゼミナールとは違う雰囲気の中で楽しく詩の研究を行ったりして、ゼミナールメンバー全員であらゆる場面で楽しく交流を深めています。今年のゼミ合宿はメンバーの話し合いの結果、上野の博物館に行き、さまざまな絵画をみたり、浅草観光をしたりしました。そして、美術のいろんな世界や感情に触れることで、詩



の世界に似た美術のいろいろな世界を研究しました。私たちは、とても優しい先輩たちやダンディーなマクミラン先生と楽しく活動を続けています！もし、杏林大学に入学してゼミを選ぶ機会があった時は、是非マクミランゼミナールをお選びになるといいと思います。きっと、卒業する時にはマクミランゼミナールに入ってよかったと思えることでしょう。私たち一同はマクミランゼミナール志望の学生さんを大歓迎しています。どうぞマクミランゼミナールをよろしくお願いたします！

吉村ゼミナール

<アメリカ文化・文学・社会・人種問題等>

相原 尚子

吉村ゼミは、4年生7人、私たち3年生は女子12人で構成されています。

☆授業内容☆

普段の授業では、主にアメリカの歴史や文化、人種差別問題についてのディスカッションです。ビデオを見たり、英語の文献を読んだり、日々アメリカに触れています。調べてきたものについてのプレゼンテーションやハンド・アウト作成には手こずります。はっきりしない箇所について意見を求めると、先生はなんでも答えてくれるので、知識の深さに驚かされます。授業の雰囲気は、静かな時もあれば和気あいあいとしている時もあります。

☆合宿☆

夏の合宿では、2泊3日で軽井沢に行きました。車で行ったので荷物もらくちんでした。ゼミ合宿における



ディスカッションのテーマは、よく耳にする「アメージング・グレイス」。それについてのビデオを観た後に感想を述べました。それまでは歌詞の意味も知らずに口ずさんでいたこの曲には、とても深い意味があります。でも、更にこの曲が好きになりました。そして合宿ではハイキングやバーベキューなどを楽しみました。みんなの親睦が深まりました。

☆終わりに☆

みんな仲良く、とても楽しいゼミです。授業としても、アメリカの知識が増えて、結構楽しいです。少しでもアメリカに興味があれば、このゼミをお薦めします。

渡辺ゼミナール

<アメリカってどんな国？ アメリカ人て誰？>

難波 静香

「アメリカってどんな国？」さて、あなたならこの質問に対してアメリカをどう説明しますか。あなたが抱くアメリカ像は何を根拠にしたものですか。それは、偏った先入観による思い込みではありませんか。もしそうであるとしたら、誰が何を意図して私達にそのようなイメージを植え付けたのでしょうか。渡辺ゼミでは、アメリカの背景と人種差別問題を基にして「先入観」や「イメージ」の根源と、現実とのギャップについて研究しています。

並行して、与えられたテーマに対して論を組立てる特訓をしています。「一つの主張に対して三つの視点から論を立てること」と「正しい日本語を用いて主張を適切に表現すること」は、なかなか困難であり毎回悪戦苦闘を強いられています。物事を三つの異なった観点から捉える力は就職だけでなく、視野を広げることにもつながり



ます。また、他人の論を批評・修正することは要点・焦点を正しく捉える練習にもなります。

ゼミは学生主体であり、各々の発言によって初めて成り立つので、畏縮することは誰一人として許されません。ゼミの方向性も学生の意向に沿って柔軟に変化するので、ゼミという場を生かすも殺すもゼミ生次第です。授業中は渡辺先生とゼミ生が毎回白熱した議論を繰り返しています。また、渡辺先生の知識と経験談の引き出しの多さには毎度驚かされます。我々ゼミ生にとって渡辺ゼミナールは、刺激を求められる究極の場所です。

高倉小学校英語活動クラブ 「英語であそぼうクリスマス」 に参加して

豊田ゼミナール 6セメ 河野 結実

12月14日(水)。小学校の先生方にも手伝っていたいて、体育館を装飾して、なんとか準備をし終え、あとは子どもたちが来るのを待つばかりです。すると、元気な90人の子どもたちが入場してきました。私たちは子どもたち1人1人に「Hello!」や「Hi!」などと声をかけたり、ハイタッチをしたりして迎えました。私たちに「Hello!」と元気よく答えてくれる子もいれば、恥ずかしくて下を向きながら小さな声で「Hello...」と言う子もいました。その後、ゼミ生1人1人の簡単な自己紹介と田中先輩によるマジックがありました。子どもたちは、私たちゼミ生を小さな目をぱちくりさせて興味津々で下から見上げていました。私はそんな子どもたちがかわいくて、わくわくしてしまいました。

まず、クリスマスゲームとクリスマスカード作りをしました。3年生と6年生グループで4チーム、4年生と5年生グループで4チーム作り、4チームずつゲーム班とカード作り班に分かれました。1チームに1人、ゼミ生が加わって作業しました。クリスマスカード作りは、表紙に「Dear My Father」や「Dear My Mother」など贈る人を書き、中に「Merry Christmas」や「Happy Holidays」などと好きなメッセージを書き、最後に「From〇〇」と自分の名前を書いてもらいました。みんな両親や兄弟などへ、色々な人にかけていました。カード作り時間が少し短かったようですが、とても素敵なカードを作ることができました。クリスマスゲームは、英語で『福笑い』と『だるまさんが転んだ』をしました。どちらのゲームも、チームが団結して楽しんでいました。同時に、異文化理解として、世界各地のクリスマスの絵を飾ったコーナーやクリスマスに関する仕掛け絵本などが置いてあるコーナーもあり、子どもたちが自由に見られるようになっていました。

その後全員で、2月の発表のために、英語の歌の練習をしました。子どもたちは、かわいい振り付けをしながら、大きな声でしっかり歌えていました。歌が終わると、ゼミ生特製のアップルサイダーをみんなで飲み、一休みしました。すると、豊田先生からサンタクロースがみんな



のために、プレゼントを持ってきてくれているという情報が入りました。みんなプレゼントということばに、目を光らせていました。「Santa Claus!!!」大きな声で呼ぶと、井上君扮する「井上サンタ」の登場です。サンタクロースとのゲームに勝ったら、サンタからプレゼントがもらえるということで、みんな必死にゲームに参加していました。

さて、とうとうお別れの時間です。自分の班の子1人1人の名前を呼んで、「Thank you」と言ってプレゼントを渡し、握手をしました。とても短い時間だったけど、私のことを先生と言ったついでにくれた子どもたちが、かわいくて仕方ありませんでした。

今回このような活動に参加させていただいて、とても勉強になり、また自分の無力さに失望しました。先生になるべく英語を使って接するようにと言われ、意識していても、なかなか言葉が出てこなかったり、長い文の説明になると、日本語に頼ってしまったりしました。また、子どもたちが言うことを聞いてくれなくて、走り回ったり、おしゃべりしていたりするときも、強く言えず、集中させることができませんでした。今回は本当に反省点ばかりです。しかし、何よりも子どもたちの楽しそうな笑顔や、純粋な気持ちが本当に新鮮で、私自身とても楽しめました。来年も、高倉小学校英語活動クラブのクリスマスイベントにぜひ参加したいです。貴重な体験をありがとうございました。







杏園祭を終えて

6セメスター 岡野 知世

今年の杏園祭は10月29日・30日と2日間にわたって開催され、天候の心配もありましたが、無事に終える事ができました。初日は、延べ約1500人、二日目は延べ約2800人が来校されました。

テーマ「そうだ、杏園祭へ行こう！」を掲げ、このテーマの趣意は多くの来校者に学園祭に来ていただくのと同時に在校生が楽しんで参加できる、そんな実行委員全員の思いから、このテーマが生まれました。

今年の杏園祭では、屋外ステージ上で「魔法戦隊マジレンジャー」によるヒーローショーを行い、多くの子供達・ご家族が観に来て下さいました。企画のほとんどは中高生を対象としたものであり、幼年層向けのこの企画案については、実行委員会の内部でも賛否両論がありました。しかし、幅広い年齢層に楽しんでもらおうという気持ちから、ついに委員会内部で、この企画が認められました。当日のステージ前の会場では、開始時間前から人が溢れるほどの盛況ぶりで、お子様をはじめ、ご父母と幅広い年齢層の方々に楽しんでいただきました。



<マジレンジャーと共に>



<杏園祭実行委員>

室内企画では、お笑いの山口智充さんによる、「ぐっさんワンマンLIVE」が行われ、当日チケットが数分で完売するという盛況ぶりでした。

また、各ゼミナール主催の室内展示・研究発表、日本語スピーチコンテストが行われる等、日頃の研究成果を披露した内容となりました。また、研究発表以外にも、恒例のクラブ・ゼミナール団体による模擬店が出店され、杏園祭の活気に繋がり大いに盛り上げてくれました。

2日目の夜には松田記念館で「Lead」コンサートが行われ、約1400人もの観客動員がありました。

私自身、学園祭実行委員会に入って3年目となり、昨年はステージの責任者という立場でした。その時は局員をまとめたり、ステージ全体の構想を内部で議論したり、また具体的な進行について綿密な計画を打ち立てていきました。失敗をし、指摘を受けながらの活動でしたが、貴重な経験をした一年間でした。その経験が委員会内で評価されたのでしょうか、今年は、副委員長という大役を任されました。実行委員長を補佐するとともに、実行委員会全体を視野に入れた意見を述べ、また後任のステージ責任者の指導を行う等、10

■ 学生生活だより：杏園祭をふりかえって

月の杏園祭を成功させるために苦労しながら頑張っていました。

中でも今年のステージ局は新入生の配属が多く、初心者が多いため一から教える事が多かったです。特に企画内容に関しては何度もミーティングを行い、積極的な意見交換を行うとともに、疑問を抱いた点には納得のいくまで、徹底的に話し合いました。

夏休みを返上しながらも活動を続け、計画通りに進まない事がありました。前日ぎりぎりまで入念な準備とリハーサル等を行い、当日を迎える事ができました。



<グラウンド企画：「杏リンピック」にて>



<ステージ企画：「まくやつ」にて>

昨年度までは、二つのステージを設け二ヶ所に分散して各ステージイベントを開催してきましたが、今年は新たな試みとしてステージを一箇所のみ設営し、一本化する形式をとりました。一本化については委員会内部でも反対意見がありましたが、来校者の集客の強化、タイムテーブルの把握の効率化、目玉企画の重複を避ける狙いがありました。今回の変更については、大きな決断をしたと思います。

私たち杏園祭実行委員会は、杏園祭をより良く、より楽しくするために、4月から活動してきました。今回の、杏園祭の成功のかけには、多くの教職員の方々、ご父兄、卒業生、地域住民の皆様、協賛企業各社のご協力を頂いた上での成功だと思います。

最後に杏園祭実行委員会一同より心から感謝申し上げます。



杏林大学がきっかけ

外国語学部専任講師 岩本 和良

はじめまして、岩本和良と申します。97年3月に杏林大学外国語学部を卒業し、その後アメリカ・カナダと約7年の留学生活を送り、この10月より専任講師として母校に帰ってきました。アメリカでは英語教授法、カナダでは言語学を専門に勉強し、ここ数年は、人と類人猿のコミュニケーションについても研究しています。今では「研究している」などと言えますが、留学したての頃は英語力不足だったため、授業について行くだけで精一杯でした。一度だけですが、勉強が辛くて涙を流したこともありました。今振り返ればすべて良い思い出です。そんな7年間は私にとって大変貴重な財産となりましたが、その留学を決意させてくれた杏林大学はもっと大きな存在です。そこで、自己紹介も兼ね、私がどんな留学生生活を送り、どう留学を決意したのかをお話したいと思います。

大学入学したばかりの私は、得意だった英語を使った職業に就けることを夢見、やる気と気合で満ち溢れていました。しかし入学後、1ヶ月も経たずにそのやる気は失われてしまいました。自分は全く英語を使うことが出来ず、得意だったのは英語の問題を解くことだったと気付いたからです。テストでの穴埋め問題や英文和訳・和文英訳はある程度できましたが、ネイティブが話す英語を聞いても良く理解できず、自分が持っていた英語の知識を、実際の会話でどのように使えばいいのか良く分かりませんでした。そのことに気付いてからの1年は、部活と飲み会とアルバイトが中心で、勉強は疎かになっていましたし、その年の成績は人に言えるものではありませんでした。

しかしそんな私を救ってくれたのが、ゼミでもお世話になった先生でした。先生はいつも、「中学・高校のような音なしの英語では駄目だ」と仰い、私はその言葉に大変感動しました。私の役に立たない英語の大きな原因がここにあったからです。怠けた生活の中でも、唯一先生のクラスだけは真剣に取り組みました。音を中心とする英語の練習と先生のご指導のお陰で、発音が良くなると共

に少しずつ聴解力も付いてきました。1年の終わりに近づくにつれ、自分に自信が持てるようになり、同時に自分が受けてきたような英語教育を少しでも改善したいと、大胆なことを思うようになりました。つまりその先生がきっかけで、英語教師の道を考えるようになりました。

他の先生方からも大きな影響を受けました。入学当時のようなやる気を取り戻した2年生からは、一つ一つの授業に真剣に取り組むようになりました。すると、授業が面白いということ、先生方が大変親切だということに気が付きました。ネイティブの先生は、クラス外で会話の練習に付き合ってください、ある先生は、部外者の私を、その先生のゼミにまで参加させてくださいました。こういった先生方のお陰で、何でも自ら取り組むことの大切さ、勉強することの楽しさ、そして言葉の面白さを知り、4年生までに大学院留学を決意するに至りました。

決して模範的な留學生生活ではありませんでしたが、先生方にお世話になった4年間があったから、今の私があると思います。今回教員として戻り、実用的英語の指導は勿論ですが、私も学ぶことの楽しさを皆さんに伝えられたらと思っています。まだまだ未熟ですが一生懸命頑張ります。共に杏林大学で成長していきましょう。



岩本和良(いわもとかずよし)

1997年 杏林大学外国語学部英米語学科卒業

1999年 Central Michigan University 修士課程(TESOL)修了

2005年 York University 博士課程単位取得退学

本年10月より杏林大学外国語学部専任講師

ホスピタリティを求めて

外国語学部専任講師 木崎 英司

私は、この10月より外国語学部にて講師として着任致しました木崎英司と申します。「サービス産業論」と「ホスピタリティ論」を担当致します。私たちが日常生活で出くわす心温まるサービスから不愉快なサービスまでその仕組みについて学生のみなさんと日々一緒に考えています。

【私の略歴】を紹介させていただきます。

昭和62年(1987年)に日本航空株式会社へ総合職客室系社員として入社しました。最初の配属先は新東京国際空港(現成田国際空港)の旅客部門で、出発時のチェックイン業務や搭乗口のご案内など、航空会社で必要な接客対応の基本は空港勤務の時に教育されました。(叩き込まれたと申し上げた方が正しいかもしれません。)当時を振り返ると毎日の生活にはとても変化があり、文化や宗教、言葉の違う国の方々と接する日々には、それまでの22年間の価値観が変わるほどの出会いがいくつもありました。中でも印象的な出来事だったのは、発展途上の国からの難民が約40名の団体で第3国に乗り継ぐ様子を見た時です。物に溢れ物質的には裕福な日本に生活することは、決して当たり前前の生活ではないことを痛感しました。入社から2年後、空港の仕事にもやっと慣れてきた頃に客室乗務員として国内線を乗務するよう辞令がありました。その翌日から約3ヶ月間、アシスタントパーサーとして乗務するための訓練を受けましたが、今振り返るとこの時期が人生の中で最も勉強した時期でした。礼儀作法から緊急脱出の訓練、乳児用のミルクの作り方からスクリュードライバーの作り方まで、日本語や英語、アナウンスや飛行機の構造、日本や世界の地理に加えて時差計算等々、様々なことを学びました。その後は主な担当路線であったニューヨーク線を中心に国内線と国際線を約10年間乗務しました。乗務の際にも人生観が変わるほどの出会いがありました。中でも印象的な出来事だったのは、大勢の豪州の夫婦がアジアの子供を養子として引き取りに行く様子を目にしたときです。機内ではその子供を本当に大切に抱きしめ、どのご夫妻も時々頬ずりをしながら子供の寝顔を幸せに満ち

た表情で到着地までずっと覗き込む様子を見て、自分の子供の命を軽視する事件が報道される日本に生きる者にとって、それは「人の愛とは何なのか?」を深く考えさせられる出来事でした。その後は、乗務と地上勤務を繰り返し、地上勤務では主に機内サービスに関する企画や客室乗務員の採用と育成に携わり、杏林大学に着任する直前には客室のサービス品質管理を担当していました。

【杏林大学での抱負と学生の皆さんにメッセージ】

サービス産業論の授業中にも同じ話をしましたので、受講された方は重複する内容で恐縮ですが、皆さんに是非以下について真剣に取り組んでほしいと思います。一つ目は、皆さんの周囲の方への感謝の気持ちを忘れないこと。毎日、杏林大学で学ぶことが出来ることは決して当然なことではないということを認識してほしいと思います。そしてもう一つは、「自分は何が好きか?」を考えることです。皆さんは、自分が好きなことであれば少々大変なことでも苦にならずに続けることができ、上達も早かった経験がおありでしょうか?勉強にしても仕事にしても同じことが言えると思います。将来において「自分は何をしている時が好きか?」を真剣に考えてほしいと思います。そして既に将来の夢をお持ちでしたら是非その夢に日付を入れてください。夢に日付を入れることでそれは夢ではなく目標に変わります。夢を実現するために、「何時までにXXをする!」と目標を立てるのです。そして、まず、最初の一步を歩き出しましょう。私はその目標の実現に向け、微力ながら全力で皆さんの手伝いをしたいと思います。教室に限らず、食堂や通学途中でも見かけたらお気軽に声をおかけ下さい。お待ちしております。



<1992年、ミュンヘンサミット出席の宮澤内閣総理大臣と10日間同行、ミュンヘンでの一こま>

< J E C の由来 >

「ジェック」と読み、**Japanese**、**English**、そして **Chinese** の各々の頭文字をとったもの。杏林大学外国語学部の創設時の3学科「日本語学科」「英米語学科」「中国語学科」に因む。常に初心に立ち返り、教育と研究に全力を傾ける気持ちを意図する。

< 編集後記 >

『J E C』は、杏林大学外国語学部と学生のご父母・保証人の皆様を結ぶ情報誌です。本年度より学生委員会から広報委員会へ移管され、杏会からのご援助のもと、学生サービスの一環として、教員が編集しております。

本年度は、昨年度と同予算で夏号・冬号の年2回発行することができました。在学生の皆さんが帰省される頃にお届けし、『J E C』を見ながら、杏林大学外国語学部についてのお話が弾めばと願っております。

内容も含めて、写真は総カラーと品質も高めることができました。編集者の無理な注文に答えて下さった先生方、学期末の試験期間が迫るなか協力を惜しまなかった在学生の皆さん、そして(株)柴田印刷所の柴田健彦氏のお陰です。ここに心より御礼申し上げます。

お読みいただいた皆様のご感想・ご意見をお待ちしております。

(広報委員会 J E C 編集担当 嵐 洋子 arashi@kyorin-u.ac.jp
稲垣 大輔 inagaki@kyorin-u.ac.jp)

KYORIN JEC 2005 年度冬号	
発行年月日	平成 18 年 2 月 1 日
発行人	杏林大学外国語学部杏会 〒192-8508 東京都八王子市宮下町 476 TEL 0426(91)0011
印刷所	株式会社 柴田印刷所 〒192-0062 東京都八王子市大横町 2・6 TEL 0426(22)0857



<http://www.kyorin-u.ac.jp>